

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
正信 粉雪		由美子 荒一葉 珪子 鶴城		曆文 修 俳爺 清吉 かげろう	静香 稀香	喜夫 六弦	チアキ	ことは マスマ	清吉	いちい	きいち 由美子		香稀 風舍 翔太 チアキ	夫 るみ子 正信 俳爺 風舍 京子		
飛花落花襟の社章の裏返し	大海を飲み干す酒場桜鯛	ひとりごとと言ふて日永の鼻眼鏡	花曇「桜回廊」溶け入りぬ	白木蓮妖しきままでに闇に浮く	雀の子スロースタート学び舎へ	山桜遠くにおいてひとり酒	うずうずと竿繕へり上り鮎	舞へよまへ万物の精春の野に	春昼や木魚に浅き眠りかな	永き日や露天湯の媪話好き	雨呼んでおぼろの山のなほ朧	花衣手繰りて銭を投げにけり	無辜之民ミモザの庭に葬（はぶ）りけり	春泥をヒヨイと飛び越すハイヒール	句が軽やかで心地よい。身軽さの表現が良い。人生のぬかるみ、人間関係のしがらみには捉われず、ハイヒールで闊歩する現代女性の逞しさがよく表現されている。瞬間をとらえた俳味のある句。スニーカーでなくハイヒールが良い。悲惨なウクライナの状況を表現を抑えながら、清らかに詠んだ。「ヒヨイと飛び越す」が良い。	
愛社精神の旺盛な人は、飲み屋に入る時は社章を裏返しにする話は聞きました。裏から解釈して、作者のペーソスを感じました。退社なさったのか、裏返しの社章が効いています。		老いてゆく時間のゆつたりさを感じます。なんか同感。春の日永を持って余す作者の姿が目に浮かぶ。季語が生きている。鼻眼鏡がすべてを物語っている。		中七の措辞が秀逸。闇に浮かぶ白、確かに妖しさがある。名月やでは冗長。白木蓮でこそ季語が効いた。白木蓮の中七、下五の表現語句に共感。素晴らしい一物仕立てで、白木蓮の妖艶な美しさが目に見えるよう。	「雀の学校」の歌を思い出して、楽しい句。童謡すずめの学校を想起しました。小雀も学校で生き方を学ぶのですね。	遠くにおいてが絵画の観賞を連想し素晴らしい。中七の表現がよく、遠近法が効いています。	うずうずが効いていて、釣り人の様子が良く分かる。上り鮎が素晴らしい！	のんびりと過ごす春の一日。鼻眼鏡がいい風情です。長い間春を待ち焦がれていた草や樹々。時が来ると一斉に芽を吹き花を咲かせる。それらの命への「舞へよまへ」という呼びかけに春を待つ弾むような思いが読み取れる。	春の昼のけだるさ、心地よさを上手に表現している。	のんびりした時間の流れを感じる。	おぼろ、おぼろが良い。雨の日はすべてが朧。世界がグレーに染まります。	戦争ではいつも民が犠牲になる。季語がその悲しみを表している。ウクライナは泥沼状態になっています。悲惨なウクライナの状況を、表現を抑えながら、清らかに詠んだ。時事俳句、追悼句として優れている。華やかなミモザ咲く庭に埋葬するとは！ウクライナに早く平和が来て欲しい。現在のウクライナ情勢を詠んでいて心に響く。				
網野月を	檜鼻ことは	後藤允孝	反町修	後記朝香	望月のぞみ	寒立馬	かげろう	池田珪子	新曆文	本橋稀香	荒一葉	秋谷風舎	木村隆夫	古賀由美子		

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
		のぞみ 清吉	曆文 朝香 鶴城	京子	粉雪				修道を 俳翁 珪子 鶴城 翔太				正信 修 マスミ	かげろう
幾千万の花菜明かりや明日を待つ	のどけしや双子のパンダじやれ合うて	暁の雨の重たし八重桜 <small>季語の特長を鮮やかに表現している。</small>	墨堤や花雲になり滝になり <small>満開の桜の華やかさが表現されている。隅田川の桜の様子に変化を持たせた表現が素晴らしい。</small>	逃水や亡き兄弟の姿見ゆ <small>季語の斡旋が良い。</small>	里山の札所六番竹の秋 <small>竹の秋が明るい景色を引き立てている。</small>	ようやくに師と吟行す花の下	蒲公英の綿毛飛び去り春深し	ブランコの静かに揺れる桜まじ	享年は天にまかせて花見酒 <small>運命は天に任せて今生を楽しむ、季語がびつたりはまっつている。俳諧味溢れる句。あの世はこの世、この世はこの世と開き直つた詠みぶりに共感。花見酒はかくありたい。御同感、そして西行の望む様に。好きな酒なら命惜しまず、割り切りの諧謔。寿命など考えずに思い切り生きようとする姿勢が良い。</small>	高層の屋上の庭薔薇芽吹く	春深し社の鯉は悠然と	花吹雪芸の肥やし朝帰り <small>まさに「浪花恋しぐれ」の初代春團治の世界。花吹雪の中を堂々と胸を張つて朝帰り。羨ましい限りです。季語が効いている、歌舞伎役者などを想像する。朝帰りの言い訳に「芸のこやし」の措辞。粋と俳諧味を感じる。</small>	赤錆の戦車置き去り受難節 <small>赤錆色は先の大戦時からのソ連の戦車の伝統色だが、置き去りにされてみると侘しい。</small>	
宮崎チアキ	俳翁	小林京子	山中いちい	村杉清吉	岡田芳春	木村るみ子	井口俊晴	奥山粉雪	染谷正信	保坂翔太	石関六弦	丸山マスミ	渋谷きいち	青木鶴城

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
荒一葉				俊晴 瑠子				晴香 春太 俊稀 芳翔 京子	朝香 允孝		喜夫	風舎 允孝	隆夫	俊晴
まず値切ることから入る植木市 <small>「まず値切る」という俳諧味が良い。</small>	陽炎や故郷の墓地に祖母来しか	のどけしや明けやらぬ海まどろみぬ	恋猫となれず抱かれて戻り来し	ポスターは行方知れずの恋の猫 <small>可哀そうに、見つかるといいね。着眼点が良い。</small>	花影を踏んでみれば花吹雪	若芝や腹這いで聴く「なごり雪」	逆光やポニーテールと蓮華草	亀鳴くや妻にも第二反抗期 <small>お疲れ様です。奥様の機嫌を損ねたのですね。第二反抗期の表現が可笑しい。「亀鳴く」という面白い季語が効果的です。妻が妙に不機嫌な時がある。「亀鳴く」と「第二反抗期」の取り合せが絶妙。季語の幹旋、これ以上ない。</small>	桜鯛跳ねれば光る滴かな <small>桜鯛の活きの良さと光る滴で春を感じる。大きくて身がしまっている桜鯛。威勢が良いですね。</small>	春の鴨番の一羽飛びにけり	引越しの荷も毛布着て寒戻る <small>荷物の毛布の表現が寒さを感じます。</small>	竹の秋背丈に合はぬランドセル <small>児童の成長著しさを見た感慨が読みとれ、更に今後の成長への期待も感じとれる。季語がよく活かされている。新入生のうちはランドセルは背丈に合いませんが、上五の竹の秋と引き合っているように思いました。</small>	戦争と平和のあわひ（間）↑難解ですがトルストイの如く平和の希求と解釈。	稚跳ねて地球をノック春の草 <small>幼児がぴよんと跳ねたことを、地球をノックと詠んだところがいい。</small>
後藤允孝	かげろう	寒立馬	望月のぞみ	本橋稀香	池田瑠子	新暦文	古賀由美子	荒一葉	木村隆夫	秋谷風舎	霜里	持永喜夫	日高道を	野田静香

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	
		ことは 六弦			のぞみ ことは きいち	喜夫	荒一葉 いちい	芳春			道を	由美子 允孝 芳春 かげろう	道を 静香		きいち
ジヨギングの脚を緩める花の下	着弾の穀倉地帯陽炎へり	竹の秋教へ上手の伯父の技 <small>教え上手の方は、仕事上手で話は控えめ。お会いしてみたいです。伯父の技が何か気になります。</small>	梨の花真間手兎奈に会いたくて	子ら逃げてジャングルジムに毛虫這う	蛤の潮吹く音のきこへる夜 <small>寝付かれず、ふと微かな音に気付いてしまった。明日の朝は蛤のお吸い物。静かで楽しみな夜ですね。明日のビールが楽しみ。</small>	遠くなる耳も喜寿なり春愁 <small>老いの悲しさを淡々と受け入れる清さかな。</small>	廃線の駅舎に懸かる花の雲 <small>昔の賑やかさを偲ぶ情景に季語が生きている。華やかさがわびしさを際立たせている。</small>	晩春やまた旅立ちし寅次郎 <small>寅さんは晩春になると旅に出なくなるだろうなど、共感しました。</small>	遠くからでも揺れてゐるチューリップ	薄墨の花の名残や東慶寺 <small>見事に景を詠み切っている</small>	春眠やカラスはトタン屋根歩く <small>トタン屋根を鳥が歩くとトントンとのどかな音がします。春らしい音。安眠妨害の状況が良くでています。春眠をじやまするカラスの足音が聞こえてくる取合わせ、おもしろいです。春の朝の明るいき空を感じます。休日に朝寝坊をしていると窓の外のトタン屋根を歩く動物の音が良く聞こえ、共感度高い。</small>	銃声も砲音もなき巣箱かな <small>平和を祈る気持ちに溢れている。季語の幹旋が秀逸。</small>	富岡の桜並木や人の影	道の辺の緋桃盛りやフラメンコ <small>緋桃とフラメンコの賑やかな取り合わせが良い。</small>	
山中いちい	木村るみ子	岡田芳春	染谷正信	井口俊晴	奥山粉雪	保坂翔太	渋谷きいち	丸山マスマ	石関六弦	檜鼻ことは	網野月を	青木鶴城	後記朝香	反町修	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
							静香	マスミ 六弦		隆夫 るみ子のぞみ 粉雪	暦文 チアキ	るみ子	いちい	
							春愁にゆつくり急ぐ出社前 ゆつくり急ぐが季語にびつたり。	傘振りて穀雨の水を撒き散らす 傘をたたもうとして雨滴を振り切る。雨も穀雨と思えば、豊作を願い天に感謝の気持ちも湧く。何気ない動きに春の喜びを感じます。	言霊のよぎる並木や夕桜	点滴のしづく数ふる花の冷え 闘病患者の心情が伝わってくる。季語で気持ちが分かる。心の冷えが、点滴の滴に現れています。	モナリザの瞳の中の春愁 春愁が過去、現在、未来を捉えている的確。モナリザが良い。	避難民の思ふは祖国リラ薫る ウクライナの人の思いが伝わる。	人肌の爛を手酌に木の芽合え 人肌の爛と木の芽の取り合わせのぬるい感を手酌が引き締めている。	ライラック宝塚観し帰り道
							持永喜夫	霜里	野田静香	俳翁	日高道を	宮崎チアキ	村杉清吉	小林京子